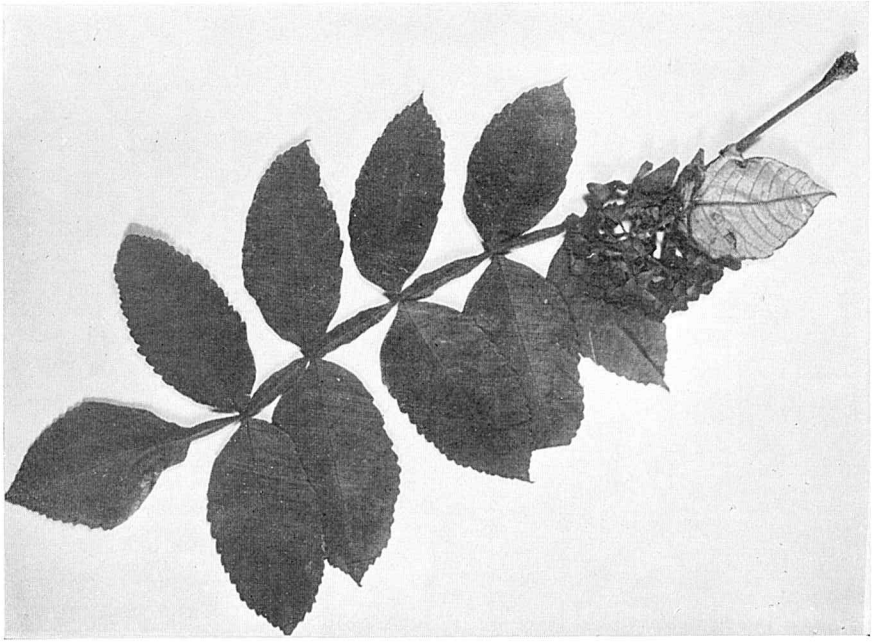
図 版 1



ヌルデの小葉の中脈基部に生じた　花 附 子
東京・原町田にて採集（August 26, 1959）

ヌルデ Rhus semialata Murray
横須賀市，追浜にて撮影す（September 14, 1958）

カツノキ考

大谷茂*

往時民間の正月行事というと、元日から始まる大正月よりも、一月十四日、十五日を中心として行われた小正月の方が重視されていたようである。というのは多くの行事、呪法、禁忌等が小正月に集中されているからである。そして何れにせよ、今でも残っているこれら習俗を見て意外にもカツノキが多く使用されているのである。

上州信濃川沿いの秋山地方から秩父、富士、愛鷹、丹沢と相当広く残っている習俗に、追つかど棒（追門棒、御門棒）というのがある。その中心は相模と武蔵、つまり丹沢と秩父地方である。このカツノキの棒の先の方は人の頭部にかたどって太くし、ここに稲穂をつけたもので、家の入口或は畑のかどに立てて厄よけとしたものである。西丹沢の世附部落では門入道と呼んで、棒ではなく、いわば追門棒の先の方の部分だけで、人の顔をえがき普通男女一組を門口とか神棚に供え正月中置く習慣がある。この門入道は同じくカツノキを使用しているもので、追門棒の変形といってよかろう。

山梨県御坂地方や富士山麓白糸村とか丹沢の習俗に削掛（けずりかけ）というのがある。カツノキの枝の表皮をはぎとってその表面をうすく細長く半ばまで削りかけたもので小正月の前日に作りあげ、戸口や神棚に掛ける。御坂地方ではダンゴ（まゆ玉）の枝にかける家もある。

祝棒（いわいぼう）又はホタキ棒とも鳥打棒ともいって神聖な棒とされたが之も殆んどがカツノキを使用している。この棒は山形ではヨンドリボウ、長崎ではコハラメ、新潟では嫁の尻叩きと、その呼称はちがうが、呼名の示す如く地方的にいろいろな意味でつかわれたようである。成木責といって果樹をこの棒で打つ習俗があるが、この三浦半島でも昔は相当広く行われたらしいと前田吉穂氏がいっておったが、果樹をカツノキの棒で打つのは豊熟を約束させたり、又この棒に豊産の力を認めたからに違いない。

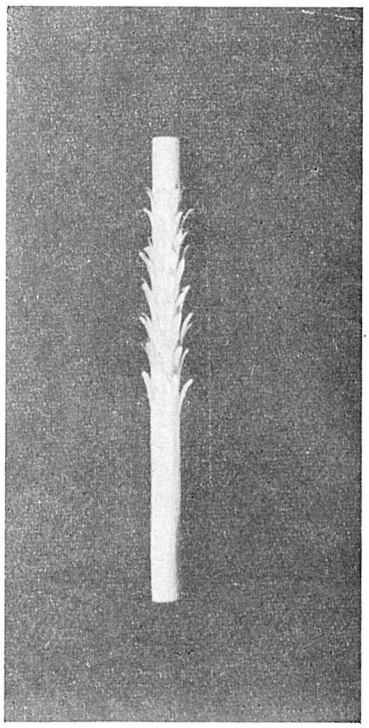
その年の豊作をうらなう前兆予示の習俗に粥占（かゆうら）というのがある。カツノキの棒の先に割れ目をつくって之を粥の中に入れ、それにつく粥の粒の多少で、豊作をうらなうもので十五日粥に行われたものである。今でも御坂地方では、このカツノキの棒のことを粥杖（かゆづえ）と呼んでいる。又御坂では十五日の小豆粥を食べる箸もカツノキを使っている。河口村でも正月の雑煮を食べる箸や、カマドに燃す薪も日常とちがってカツノキを使う風習が今日でも残っている。

東日本に多く見られる農作の呪法に粟穂稗穂（あわぼひえぼ——あぼへぼ）の習俗が今でも残っている。カツノキを削掛としたものを粟穂とい

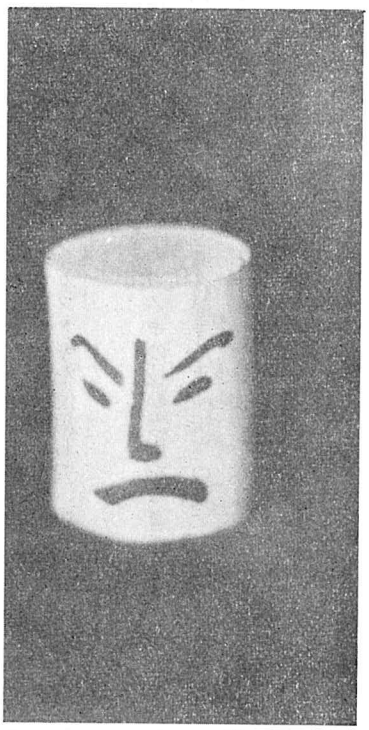
い皮つきのままのものを稗穂にみたてて普通六本ずつ束ねるか、又は細い割竹にさして、之を神棚等に立てたもので農作の開始に先立って、よく実のれと粟と稗の形を模してみせるものである。富士の白糸村ではカツノキのことをアーボ又はアーボノキといっているが、これらの方言名が古くからの農村の年中行事と共に地方の人々の間に生きていたのだといえるわけである。西丹沢の世附ではアボヘボといってカツノキを長さは一定していないが三―四寸から五―六寸位に切り皮をむいて、それを竹に通しているが、この竹は二岐のものもあり、又家の格式によって三岐とするところもある。そして竹の本の方は神棚にかけるためにまげるのが普通である。三浦半島でも古くはこの伝承があったらしく赤星直忠氏のいうには和田の奥、鹿穴の部落では曽ては行ったといわれる。又子安部落では小正月に畑に大きな竹だけをさすという。現在子安の人は鳥追いだといっているがアボヘボの本体が失われた変形と見るべく、農作の呪法の名残とみるべきものである。

房総半島の南部、安房郡一帯でアーボとか、ゲーボと呼ぶ飾り物を神棚に供える習慣が今も尚残っているが、勿論その年の五穀豊産を祈願するものである。主基村上小原部落ではこれをナリモノセといっているが祈願の意味をよくあらわしているではないか。この地方のアーボは実に複雑で穂の外にカマやクワをかたどったものを藁をたばねた俵をあらわすものにさしてる実にこったものだが粟穂稗穂の変形と見てよい。只異るのはカツノキの代りにニワトコを材料としていることである。従ってニワトコのことをアーボノキといっている。西丹沢世附ではカツノキを正月四日の初山の時に切り十四日の左儀長のとき神棚に供え、二月一日のタナ納めに道祖神に納める風習だが穀倉に供えたものは、その年のススハライまでおく家もある。

木の枝につけた餅花の一種に、まゆ玉の習俗がある。この時の木は、ミズキ、エノキ、ツゲ等が多く用いられるけれども、白糸村で

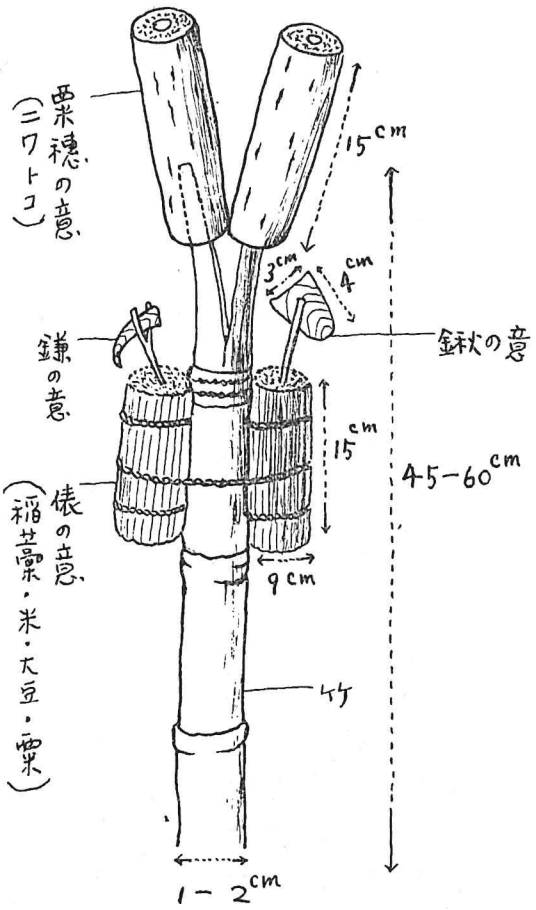


A

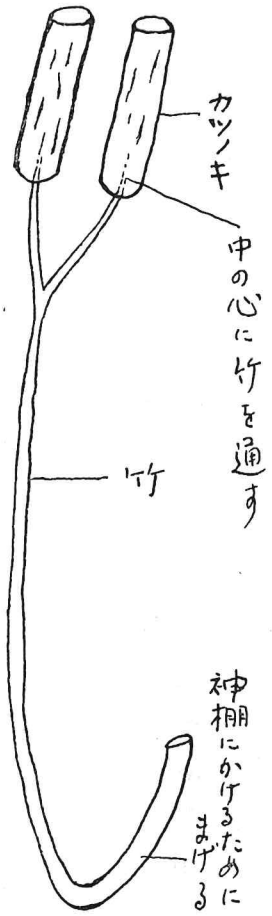


B

第1図　西丹沢世附地方の習俗
A　削掛
B　門入道



第2図　千葉県安房郡のアーボ



第3図　西丹沢世附のアボヘボ

はカツノキをつかっている。又丹沢の世附では、まゆ玉を立てる方形の台は周囲の材はカツノキを束ねて造り、その中にウメ、カシ、ツバキ等の枝をさしこんで、まゆ玉を固くしめてよく立つようにしている。

中部日本の各地には削掛や祝棒の風習のほかに、家の入口や井戸などに、カツノキに十二月と書いたり、又は人の顔をかいて立てることがある。そして之をオニギ（鬼木の意）とか、ニュウギ（新木の意）と呼んでいる。

紀州熊野地方に見られる習慣に午王杖（ごおうづえ）というものがある。熊野三所の神使として作製頒布された午王宝印という危難よけの護符をもらって、之を棒の先につけて、畑に立てて害虫を防ぐ、虫よけ祈願である。このときの棒はカツノキでなく、キブシが多くつかわれ、時にゴンズイを使用しているところもあった。

このように小正月の飾り物として、今日残留して、なかには大分変形しているので何とはなしに伝承されているけれども、年の始めはその年の祈願の月であり、うらないの月でもあって、作物の豊作を祈り、又災厄をふせぎ、不吉

をはらい、悪鬼を除き、駆虫への呪物であったのである。カツノキの土言も恐らく勝つの木即ち鬼に勝つ木の意であろう。古くこの木をもって釆配の柄とする習慣もあって将軍木ともいわれた。このカツノキが殆んど民間の伝承につかわれてはいるが、なかには前に述べたようにミズキとかキブシ、ニワトコ、ゴンズイが用いられていることは、これらの樹種はあまり問題にする必要はなく、つまりあまりこだわることなく、もっと根本的に何か信仰対象の樹種があるのであって、たまたま日本にその樹がなかったので、やむなくこれらのものに代用されたのであると考えられる。しかし全く無関係のものを使うはずはなく、赤い果実、中には硬い種子（核）があり、毎年発条する枝は勢がよく、それにつづく葉の様子等共通点があったに相違ない。それでは、その威力あるもの、やむなく代用品で信仰状態を持続したと見るその本体は何であろうか。そして代用品たるカツノキは今のどの植物をいうのであろうか。

万葉の東歌（十四の三四三二）のなかに、「あしがり（足柄）の　吾を　可鶏山のかつの木の　吾を　かづさねも　かづさかずとも」という歌がある。このカケ山のカケと、カツノ木とは何か密接な関係がありそうである。どうも支那よりの影響がありそうである。漢時代のものとされている山海経のなかには桃＋芦＋鶏の三者のとりあわせがよく出てくる。例えば「東海に度朔山あり、ここに一本の大きな桃の木あり、それに金鶏がとまっている、荼鬱壘に神がいて番をしている、丑寅（即ち北東）の門（鬼門という）から鬼が出入する。この鬼をとらえて芦虎に食わせる」。この金鶏伝説は、支那では分布の広いもので、金鶏が神体となったり、塚や墳墓に金鶏が埋められている金鶏塚があり、金鶏は元旦に鳴くとか、金鶏の鳴声は吉凶にかかわりがあるとか多数残っているのである。そこでカケとカツノキは、この支那の伝承、桃―芦―鶏　に関連があるものと思う。万葉（三三一〇）に「野つ鳥　雉（きぎし）は　とよむ（動）家つ鳥　可鶏も鳴く」と鶏をカケと呼んでいる。又万葉（七の一四一三）に「庭つ鳥　かけの垂尾の乱尾の　長き心も　思ほえぬかも」と庭つ鳥をカケといっている。又万葉に「庭鳥は　カケロと鳴きぬなり　起きよ　起きよ　吾が一夜妻　人もこそ見れ　人もこそ見れ」とあって、カケとはその鳴声によったものらしく、カケは鶏の古名であったといえるのである。ところで支那では桃と鶏の組合せであるのに、日本ではカツノキと鶏の組合せになっているのに何か問題がありそうである。桃の威力だけが輸入されて、桃の実体がなかったのでカツノキを代用したのであろうと思われる。支那に於ては古くから桃に関する伝承は多いのであってその変形とも見るべきものが日本の伝承にあらわれている事例があまりにも多いのである。支那には、桃杖―桃人―桃板―桃符と時代や地方によって変ってはいるが、桃の霊力を意識して、桃に対する吉凶、災厄除け、魔除けの信仰があったのである。日本の追門棒や門入道、午王杖はこの後漢時代悪魔をはらったという桃杖の変形であって桃の威力は伝承されていたが、その実体のないままにカツノキやカツノキと共通性あるキブシ、ニワトコがつかわれ信仰を持続したのである。古事記の伝承に黄泉比良坂で桃の実を見て食べずに鬼はにげかえるところがあるのは、当時桃の実体を知らずして、ただ桃の威力のみ古代から伝承されてきたのだと見るべきであって、現在の桃（Persica）は、その果実の核が登呂遺跡から出てい

ることから恐らく弥生式文化の末期頃支那から輸入されたものと推測さるべきである。藤原京の遺跡になるともう相当発見されている、従って平安時代には追儺（ツイナ）の行事にも又、卯槌の行事にも桃の木が悪鬼をはらうのに使用されてきているのである。ただ民間庶民の行事は古くからの伝承で、今もってカツノキを信仰の対象としているのであろう。追門棒につける稲穂や午王杖の護符は支那の伝承の芦の変形なのである。ただ鶏に対する伝承が日本に残っていないが、日本でも子供の夜泣きに対する呪術に鶏の絵をかいた絵馬をカマドにあげたり、子供の枕元に貼ったりする風習はないでもない。鶏の宵鳴きは凶兆といい雨乞に鶏を殺すとか、水死人の死体をさがすのに鶏を水上に浮べて鳴いたところによって卜定するという習俗は何となく支那の金鶏伝説と似通うのを思わすのである。安慶では正月に門の前の石だたみに黄色い紙を置き、大晦日鶏を一匹殺して、そのしたたる血をこの紙の上にたらすという行事があるが、日本ではまだ採集したことがない。支那でも変遷はあって草包といってイネ科かカヤツリグサ科植物の葉を束ねて門につるさげる習俗があるが正しく芦の変形であり、日本の正月のシメカザリも亦この変形ではなかろうか。七草粥のときの唐土の鳥も或いは鶏の伝承の変形であるかも知れない。民族移住とともに伝承されている中にいつか源義がわすれられて来たのではなかろうか。

今日桃が支那から移入されても、古代より桃の代用とされてきたカツノキの風習が、そのまま地方人のなかに伝承され、カツノキをして古代人の信仰を持続させ、カツノキの方言とともに人々の生活に生きてきたのである。

それではカツノキというのは如何なる植物なのか。国文学者は桑科のカジノキの東語としているが、民間伝承の事実から、即ち植物の民俗学的見地からするならば、ウルシ科のヌルデとすべきである。どの地方でもカツノキと称しているものはすべてヌルデをさしている。ヌルデの方言名がカツノキとして農村の年中行事と共に残って来ているのである。

ヌルデは一名フシノキといい学名は Rhus semialata Murray（＝R. javanica L.）、漢名は塩麸子（塩膚木、将軍木、白膠木）である。ヌルデは日本全土の山野に自生するもので、多くは林縁、水辺、路傍に容易に見られる落葉の小喬木である。秋の紅葉はヌルデモミヂといわれる通りで関東地方では実に美しく山野を彩るのであって、Rhus はギリシャの古名、ケルト語の rhudd（赤色）の意で、この属の紅葉の美しさから由来した名である。この樹皮には白色の膠漆液があって、枝の切口から出る白い汁で物を塗ることが出来るので、塗り手即ちヌルデの和名が生れたのである。又白膠木の名も自然にうなずかれるであろう。葉は枝梢に集って四出互生し水平に展開する姿態の遠望はなかなかすてがたい風情がある。葉は五対内外の小葉からなる奇数羽状複葉で、葉軸に狭まい翼をもっている。夏、枝頂に円錐花序を直立して微小な白色五弁花を密開する。この花期の頃の遠望もなかなかよいものである。ヌルデは雌雄異株で雌花は退化した五雄蕊と三花柱の一室の子房とからなり、雄花は五雄蕊のみをもっている。秋季に短毛のある扁球形、緑灰色の核果を結び、よく熟すると、その表面に白粉をおびて白緑色となる。この白粉は酸性林檎酸カ

ルシウムで塩辛いので子供がよく之を嘗めることがある。シオノミ（塩の実）の方言は子供を通していつまでも生きていくことであろう。

ヌルデのことを一名フシノキというが、往々葉に虫えいを生じ、五倍子（附子、フシ）と呼ぶところから、フシの出来る木、フシノキとなったのである。どうして、フシというのであろうか。トリカブトの主根を烏頭（ウズ）といい、その主根に出来る子供を附子（ブシ―狂言ではブス）というし、又キブシ（木附子の意）という植物を見ても、花穂や果実が枝にぶらさがっているので、果実なり、花なり、それらしきものが主体にぶらさがっているようなものにつけられた呼称であったと思われる。ヌルデの小葉中脈とか枝端に虫の寄生によって出来た特殊な形の虫えいがつくところから等しくフシと呼んだものであろう。

虫えい（虫こぶ）Aleppoというのは、植物体の一部が他の生物の刺戟によって異常な発育をして瘤状又は特別な形になったものをエイ（Gall, Cecidia）といい、アブラムシ、ハチ等の昆虫、或はダニ、線虫等の動物の寄生によって出来たものを虫えいと呼んでいる。又植物特に菌類によって出来たものは菌えいといって区別している。虫えいの中にはヌルデのミミフシのように利用価値の大きいものがあるけれども、日本のナラの類に出来るコナラのイガフシという栗毬状の虫えいは、あまり利用されてはいない。又利用どころか、寄主植物に害を与えるものさえある。ブドウの根、モモ、キャベツの葉、クワの生長点等が、之がために往々寄主を衰弱、枯死させることがあるのである。没食子（Aleppo-gall）は小アジアに主に産して、我国にも輸入されインク製造に供されているが。小アジアのナラの類の植物 Quercus lusitanica Lam. var. infectoria DC. の虫えいで、タンニン含量は五八％といわれている。

五倍子は薬用や染料として重要なタンニンの原料となるところから、日本では岡山、鳥取、山口、愛媛、和歌山、新潟の諸地方ではフシの主産地として、ヌルデを栽培している。しかし国内の需要は生産を、はるかに下廻り之を補うのに支那から多量に輸入をしているという現状である。五倍子には三種類があって、耳附子、花附子、枝附子といわれている。耳附子はアブラムシの一種、ヌルデノミミフシアブラムシ（Melaphis chinensis J. Bell）の寄生により、その刺戟によって葉に出来た虫えいで、常に葉軸の翼に数個乃至十数個集って一団となり、各個体は先端鈍形の不斉紡錐状をなし、時には多少側方に突起又は裂片を生じた嚢状体である。之を乾燥したものが局方生薬の五倍子で、三種の五倍子中最も嚢壁が厚く、従って重量も大きく、タンニンの収量も多いわけである。それ故にタンニン原料として上等品とされ、最も需要が多い。花附子と枝附子とは、どちらもヌルデノハナフシと呼び、耳附子とは別個のアブラムシの寄生によって出来たもので、花附子は小葉の中脈基部に、枝附子は枝端に生じたものである。枝附子は細かに多数弁裂して、各裂片の形は細長く、嚢壁は薄いので、タンニンの含量は少ない。花附子は一番嚢壁が薄いもので重量も小さく、下等品とされ、殆んど商品価値はない。尚別に疣附子といわれる小形の五倍子を生ずることがあるが勿論利用価値はないものである。これらの附子は夏には暗緑色だが、秋になると葉と同じく紅葉して、黄色又は紅色に彩られ美しいものである。

ミミフシムシの生活史は、昭和九年に当時朝鮮で総督府林業試験場技師であった高木五六氏によって明かとなった。ミミフシムシは、オオバチョウチンゴケ（Mnium vesicatum Besch.）やコツボゴケ（Mninm trichomane Mitt.）のチョウチンゴケ類に幼虫を産落し、この幼虫は寄主より汁液をとりながら白色ろう質のマユを作って冬を過し、翌春、擬蛹、次で蛹と、二回か三回の変態を経過して、四月下旬頃マユを出て成虫となり、羽化し、有翅胎生雌虫でヌルデの木に達し、ヌルデの幹上に雌雄の無翅仔虫を産下する。この雌虫は交尾後、仔虫を産下して死んでしまうが、この新生仔虫は単性の無翅胎生雌虫で、これがヌルデの一定部位、つまり嫩葉（ドンヨウ）上に移行して定着寄生し、虫えいを形成するのである。この虫えいの中で、雌虫は盛んに単性生殖をして十月上旬頃までには一つの虫えい内に平均四千匹位になって、虫えいも次第に大きくなる。やがて擬蛹となり、更に有翅胎生雌虫となって、虫えいの開孔を待ち逸出して中間寄生植物であるチョウチンゴケにゆくのである。このミミフシの生活史が明らかになったため五倍子の増殖法が積極的に講じられるようになった。即ちチョウチンゴケ類の群生している蔭湿地にヌルデを移植して原種林を育成するとか、又はヌルデ林の附近に、チョウチンゴケ属の蘚類を増殖して五倍子を木の枝につるし自然に有翅虫の放飼をするということが実施されるようになったのである。

商品の五倍子は、タンニン五〇～七〇％を含有し、その主成分は、ペンタジガロイル葡萄糖（Penta-digalloyl-β glucose）というもので、その外に少量の没食子酸、脂肪、樹脂等を含んでいる。往時は鉄漿（おはぐろ）の材料としてきた、このヌルデの五倍子も今は色染材料や揉皮材料又はインキ製造の原料となっているのである。又ヌルデの材はやや軽軟で心材は淡黄色又は帯黄褐色であり、辺材は帯白色で、箱類、小細工物、浮木、下駄、薪炭、シイタケの原木として、かなり利用を高めている。

古代より桃の威力の伝承が移入され、その桃の代用として諸地方の風俗に残るカツノキは、まさしく現在のヌルデであって、習俗の中に生きているばかりでなく、今でも材を護摩木として焚くことも見られるのであって、カツノキに桃の力をみとめて来たと見られるわけである。現代人にとっては雑木の一つとして不用意に接している自然の一木にしか過ぎないが一木一草にも深い目をそそぐならばどこにも学問の道は秘められている。

＊横須賀市博物館